

小さな勇氣

天城町立兼久小学校 五年 赤塚 つむぎ

あるところに、勇氣と言う男の子がいました。勇氣ははずかしがり屋で、友だちがつくれませんでした。でも、勇氣は動物や植物が大好きで、いつも森に行つてアカシヨウビンの鳴き声を聴いたり、木登りトカゲを観察したりしていました。

ある日、勇氣はいつもと同じように、森の中で一番大きなガジュマルの木に行きました。すると、そこには勇氣と同じくらいの年の女の子がいました。女の子は、地面をじつと見ていました。ふと、女の子は顔を上げました。そして、勇氣に気付くと、

「おいで、おいで。」

と言うように、手招きをしました。勇氣はおどろきましたが、女の子が何を見ているのか気になっていたのので、自分も見ることになりました。そおつと近寄つて行き、女の子の後ろからのぞいてみました。地面には、

「わあ。すごいね。」

と、女の子に言いました。女の子はにこにこして、笑っていました。

「ねえ、君の名前は。」

と勇氣が聞くと、女の子はだまって、一輪の花を渡してきました。

「もしかして、ユリちゃんって言うの。」

女の子はうなずきました。

「ぼくは勇氣。よろしく。」

ユリちゃんもよろしくと言うように、手をにぎりました。勇氣に、初めての友だちができました。

それから、二人は毎日のように一緒にいるようになりました。一緒にハイビスカスの花をつんだり、川のほとりにいる小さな動物たちを眺めたりと、楽しく遊んでいました。時には、勇氣がユリちゃんに話を聞いてもらいました。

「ぼくは、ユリちゃん以外に友だちがいないんだよね。」

声かけるの緊張するし、ちょっと怖いんだよね。」

ユリちゃんは、大丈夫と言うように笑っていました。

「ユリちゃん、ありがとう。」

ユリちゃんは、ゆつくりとうなずきました。

次の日、勇氣が公園の前を通りかけた時、目の前にボールが飛んできました。

「ごめんな。」

「う、うん、いいよ。」

勇氣は、遊んでいる子どもの仲間に入りたくありません。でも、勇氣ができません。その時、急にユリちゃん

の笑った顔が、頭の中に浮かんできました。

「大丈夫だよ。」

と言っているように思えます。なんだか、勇気が出てきた気がしました。そして、勇気は、

「ぼくも入れて。」

「いいよ。名前は。」

「ぼくは勇気。」

「勇気、行こう。」

「うん。」

みんなと友だちになることができました。

次の日、勇気は友だちができたことを、ユリちゃんに伝えたくくなりました。

「ユリちゃん。ぼく、友だちができたよ。ってあれ。」

でも、そこにはユリちゃんはいませんでした。

「おかしいな、いつも来ているのに。」

と思い、待っていました。友だちとの約束があったため帰りました。その後は、毎日のようにガジュマルの木の下へ行きました。だけど、ユリちゃんが現れることはもうありませんでした。

ガジュマルの木の落ち葉が散るころ、勇気はその木の前に立っていました。今では、たくさんの友だちと毎日楽しく遊んでいます。勇気はその木の前に立ち、その下に咲く一輪のユリのそばに、一通の手紙を置いて

て行きました。

「ぼく、前は人に声をかけるのが怖かったけど、ユリちゃんと遊んで、少し勇気が出るようになったんだ。そして、少しの勇気だけだったけど、たくさんの友だちができたんだ。ぼくに足りなかったのは『大きな勇気』じゃなくて、『小さな勇気』だったんだね。これも、ユリちゃんが『ぼくはがんばれる』って教えてくれたからだね。ユリちゃん、ありがとう。」

